

# 眉山の変遷に関する研究

板東 ゆかり<sup>1</sup>・真田 純子<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 学生会員 徳島大学大学院 先端技術科学教育部 知的力学システム工学専攻  
(〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地,  
E-mail:c500931026@stud.tokushima-u.ac.jp)

<sup>2</sup> 正会員 博士(工学) 徳島大学大学院 ソシオテクノサイエンス研究部  
(〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地,  
E-mail:sanajun@ce.tokushima-u.ac.jp)

徳島市の中心部に位置する眉山は、昔から徳島のシンボルとして人々に親しまれている。山腹にあった三重塔が戦災で焼失する以前は、三重塔付近を中心に賑わいを見せており、大滝山公園と呼ばれていた。しかし、現在の山腹にそのような賑わいはなく、何らかの変化がおこったと考えられる。本稿では、眉山の空間変化と人々の眉山に対する意識の変化、またそれらの関係性を明らかにすることを旨とする。そのために、眉山の空間変化に関する年表を作成、当時眉山にあった施設や、関連人物を整理し、特定の時代における眉山開発の意図について考察した。

キーワード: 眉山, 変遷, 保勝会

## 1. はじめに

眉山は徳島市の中心部に位置する標高 290mの山であり、南西に広がる山々から這い出したかのように、吉野川に向かって市内を斜めに横たわっている(図-5)。そのため、市内の至るところから眺めることができ、またその眺めも、距離や角度によって見える山の形が異なり(図-1, 2, 3, 4)、徳島独特の景観をつくり出している。



図-1 新町橋から



図-2 徳島大学講義棟から



図-3 吉野川橋北詰から



図-4 四国三郎橋から



図-5 眉山の位置

眺めとしての眉山が、徳島のシンボルとして人々に親しまれている一方で、空間としての眉山が人々に親しまれていた時期もある。戦前は、眉山の山腹に三重塔(戦災で焼失)があり、その付近を中心に賑わいを見せていた。昭和初期に描かれた徳島市の鳥瞰図<sup>1)</sup>(図-6)を見ると、山麓から中腹にかけて賑やかに描かれている。しかし現在の山腹にはそのような賑わいはなく、何らかの変化がおこったと考えられる。



図-6 徳島及小松島ヲ中心トスル鳥瞰図(昭和6年)



図-7 図-6 左側中央部  
拡大図



図-8 図-6 中央下部拡  
大図

また、三重塔付近には「大滝山公園」(図-7)、東の忌部神社付近には「勢見山公園」(図-8)と書かれ、今、眉山と呼ばれているところが、別の山と呼ばれている。このことから、今のように眉山を一つのまとまった山としてではなく、別々の山として認識していたと推測でき、人々の眉山に対する意識も変化しているのではないかとと思われる。

以上のことより本研究では、眉山の空間変化に関する事実とそれに関わる施設や人物を整理し、空間としての眉山がどのように移り変わってきたのか、また人々の眉山に対する意識の変化、そしてそれらの関係性を明らかにすることを目的とする。

表-1 眉山に関する動き（明治中期から大正末期まで）

年号	西暦	徳島市の動き	民間の動き
明治 22	1889	10月1日 徳島市が誕生した。	
明治 23	1890	1月16日 市会開会にて「徳島市警備鐘設置規程」が議決された。	
明治 28	1895		日清戦争戦勝記念として、出軍者が神武天皇像を建立した。
明治 33	1900	徳島市の公園を「大滝山」に設置したいという建議を市会が採択し、公園設置委員会を設けたが、旧徳島城跡・城山に設置することが決まった。	
明治 35	1902	市会に対し「大滝山風致保存の議に付建議書」が提出され、大滝山風致保存に関する調査がおこなわれた。	
明治 36	1903	7月 「大滝山風致保存」に関する調査結果が市会で報告された。	
明治 39	1906	5月24日 「記念標」の敷地が、日露戦争後、参拝者が急増して狭隘となったため、城山山上に移転。それに伴い、記念標跡地に神武天皇像が移された。	
明治 40	1907	大滝山公園造園に着手した。	
明治 41	1908	4月 公園使用料条例案が提案された。 7月 「徳島公園管理規則」「公園土地建物使用料条例」が議決され、大滝山公園では臨時的なものに限定して許可されることになった。	
明治 42	1909	眉山を保安林に編入しようという動きが強まり、市会でも取り上げられるようになった。	
明治 44	1911		天野亀吉が、眉山公園の拡張と山道開発を提唱した。
大正 2	1913		天野亀吉が会長となり「眉山公園保勝会」が設立された。
大正 3	1914		1月 眉山公園保勝会は眉山公園工事に着手した。
大正 4	1915		4月 眉山公園保勝会は新道（大滝山公園から瑞巖寺山間）を完成させた。 4月22日 開通式が神武天皇像前で執り行われる。
大正 10	1921		天野亀吉没（71歳）
大正 13	1924	大徳島市建設および都市計画法適用意見書が議決された。	

## 2. 研究方法

本研究ではまず、『徳島市史』『徳島市議会史』『徳島毎日新聞』などの文献から、眉山に関する動きを抽出し、関係する施設や人物に着目して把握した。その後で、眉山の空間が変化したと考えられる時期を絞り、各時期において眉山に存在していた施設、動きのあった場所、実際に実現した内容を、その当時の様子を記述した文献や写真から特定することで、眉山の空間変化を明らかにした。

また、眉山の様子を記述した文献や写真から、各時期における施設や場所の利用状況を把握し、実際には実現しなかった動きも含めた動きの内容と照らし合わせることで、各動きの意図を推測し、人々の眉山に対する意識の変化について考察した。

## 3. 眉山に関する動きの把握

### (1) 眉山に関する動きの抽出

眉山に関する動きを把握するために、『徳島市史』『徳島市議会史』などの文献<sup>2)</sup>から眉山に関する動きを抽出し、年表を作成した。年表作成にあたっては、動きをより把握しやすいように、動きの主を徳島市と民間とに区別した。また、時期や関係施設、人物を特定するために、当時の徳島で発行されていた新聞<sup>3)</sup>を補足資料として用いた。作成した年表の一部（明治中期から大正末期まで）を表-1に示す。

### (2) 眉山の空間が変化した時期の絞込み

表-1から、次のようなことが言える。

- i) 明治30年から40年頃にかけて、徳島市による大瀧山の公園化がおこなわれた。
- ii) 明治末期から大正初期にかけて、民間による眉山の公園開発が計画され、一部実現された。

このことから、明治中期から大正末期において、眉山の空間が変化したと考えられる時期を、以下の2つの時期に絞り込むことができる。

- ・明治30年から40年頃  
徳島市における大瀧山の公園化
  - ・明治末期から大正初期  
眉山公園保勝会における眉山の公園開発
- 本稿では、明治末期から大正初期においておこなわれた、眉山公園保勝会の眉山公園化について記述する。

## 4. 明治末期から大正初期における眉山

### (1) 大瀧山

#### a) 大瀧山公園

『徳島市議会史』によると、明治40年に市によって造園された大瀧山公園は、神武天皇銅像前広場のことである<sup>4)</sup>が、当時の眉山の様子が書かれた文献<sup>5)</sup>を読む限りでは、市民の間では、麓の薬師堂から神武天皇像前広場に至る一帯が、大瀧山公園と呼ばれていたようである。

#### b) 麓から山腹にかけて

また、当時の眉山の様子が書かれた文献から、当時、眉山の中で一番にぎわっていたと考えられるのが、大瀧山の麓から山腹にかけてである。

大瀧山の麓、薬師堂の境内には、焼餅屋が二軒並んで店を開き、参拝客の休憩所としてにぎわっていた。また、薬師堂と焼餅屋の間の石段を登ると、清涼橋、不動尊が祀られている。清涼橋下を流れるのが不動の滝で、これは三段に流れる滝の一部であり、人々はこの滝を白糸の滝と呼んでいた。そのため、清涼橋の上、懸雲橋（俗称大滝橋）を渡って左手にある料亭も、白糸亭と呼ばれていた。

大滝橋より更に石段を登ると三重塔と三宜亭、三宜亭前の石段を登ると、神武天皇銅像前の広場に出る。三宜

亭をはじめ白糸、梅屋、春日野玉水と山の中腹から麓にかけて、風流な料亭があり、赤い前垂れをつけた仲居が働いていた。富田町や敬台寺前の芸妓たちが、料亭に招かれて大滝山の石段をのぼりおりしている様子は、当時の徳島の繁栄ぶりを現していると言ってもよい。

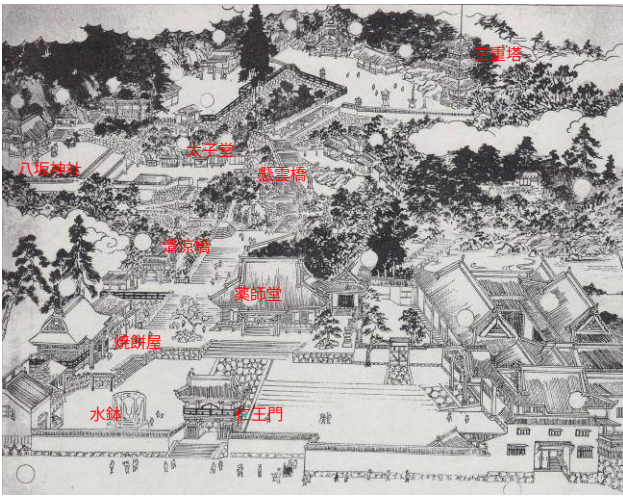


図-12 大滝山建治寺境内図 (『なつかしの徳島風物』<sup>6)</sup>より引用)

## (2) 桃山、東山

大瀧山より東方、天神社の上方の山腹を桃山、東山と呼んでいた<sup>7)</sup>。山麓には、天神社の他に、瑞巖寺や國端彦神社などの社寺が立ち並んでいた。

当時、徳島の夏祭りといえば、天神社の天神祭と言われるほど人々に親しまれ、特に新町川で打ち上げられる花火は盛大で、見物用の船がたくさん出されていた<sup>8)</sup>。

## (3) 勢見山

天神社より更に東方、忌部神社のある辺りが勢見山と呼ばれている。勢見山にも、忌部神社の他に、麓に金刀比羅宮や観音寺などの社寺が立ち並んでいた。

# 5. 眉山公園保勝会における眉山公園開発

## (1) 眉山公園保勝会に関する資料

『徳島市史』によると、明治44年に天野亀吉が眉山公園の拡張と山道開発を提唱し、大正2年に「眉山公園保勝会」を設立した<sup>9)</sup>とされている。この眉山公園保勝会に関する資料として『徳島眉山公園地全図』(徳島城博物館所蔵)がある。

『徳島眉山公園地全図』は、表面に眉山の開発図が描かれ、裏面には眉山公園保勝会設立の趣意書、幹事など役員の名前、眉山公園拡張の趣旨、(開発のための)豫算書、(当時の)山林所有者などが記述されている。

また当時、徳島で発行されていた徳島毎日新聞は、眉山公園保勝会や会長の天野亀吉<sup>10)</sup>の活動内容について何度も報道しており、眉山の開発に関する動きを知るための重要な資料である。

## (2) 眉山公園保勝会の役員

どのような人物が眉山公園保勝会に関わっていたの

かを把握するために、『徳島眉山公園地全図』に記載されている役員についての記述を、『阿波人物鑑』などの人物に関する文献<sup>11)</sup>を用いて探したところ、41名中12名の記述を見つけることができた。

記述を見つけることができた人物は、会長である天野氏を除くと全員が幹事であり、その他の役員(常務委員、庶務委員)については記述を見つけれなかった。確認することができた幹事の職業を表-3に示す。

表-2 眉山公園保勝会の幹事一覧

役職	氏名	職業	備考
会長	天野亀吉	実業家、酒販売業	眉山公園開発の提唱者、当時の眉山の土地所有者の一人
幹事長	曾我部道夫	政治家	岐阜・島根・福岡県知事を歴任
幹事	井内太平	実業家、衝器製造販売	徳島商工会議所第5代会頭
	岩佐利吉		
	板東嘉太郎		
	細井愛蔵		徳島商工会議所議員
	星合長蔵		徳島商工会議所議員
	若林虎吾	医師、医政家	
	吉見宗二	藍商、実業家	徳島商工会議所初代会頭
	竹原武吉郎		徳島商工会議所議員
	松浦徳次郎	実業家	徳島商工会議所議員
	松永嘉平次		徳島商工会議所議員
	富士谷周治郎		
	福井甚平	商人	徳島商工会議所議員
	古川市次郎		
	美馬儀一郎	実業家、銀行家	徳島商工会議所第3代、第9代会頭
	宮崎忠二		徳島商工会議所議員
	宮本圓次郎		徳島商工会議所第7代会頭
	宮崎民二		徳島商工会議所第10代会頭
	三浦浩一	医師	
	芝嘉久太		徳島商工会議所議員
	森六郎	実業家	当時の眉山の土地所有者の一人、徳島商工会議所第6代会頭
	森政一	茶人	

記述のあった11名の半数が実業家、他の人物も政治家や医師などであり、当時の名士であることがうかがえる。また、実業家が多かったことより、『商工会議所七十年史』<sup>12)</sup>で確認したところ、22名の幹事のうち14名が商工会議所議員歴任者であることがわかった。

眉山公園保勝会の幹事のほとんどが当時の名士または商人であることから、当時の徳島における商業の状況と眉山の間に何らかの関係があるのではないかと予想することができる。また幹事の中には、天野氏のように当時、眉山の土地を所有者していた実業家もおり、その所有地の位置を特定することで、他の幹事とは異なった眉山との関係性が明らかになるのではないかと考えられる。

## (3) 眉山公園開発の計画について

### a) 主な開発内容

『眉山公園地全図』に記載されている眉山公園拡張の趣旨の中で、「佐古より起點し眉山の中腹を貫通し勢見山に至る間に坦々たる道路を開墾し其兩側に櫻樹楓樹梅樹等數萬本を配置し其他四季折々の樹木及草花を栽植するにあり」と説明していることから、主な開発内容が新道開発と沿道への植樹であることがわかる。

新道のルートについては、徳島毎日新聞にて二度ほど記述されている。明治44年1月30日の記事では、「桃山より瑞巖寺山上より富田山路を通じて勢見山に出づる二千五百間の道路を開墾」と報じられ、大正3年7月

12日の記事では、「第一事業として西新町五丁目西端秋葉神社山麓より富田國端彦神社に到る山麓を五間幅の道路に開鑿する第二事業として同上國端彦神社より勢見山麓に到る五間幅道路（此延長二千五百間）を開鑿する」と更に詳しく報じられている。記事に登場する神社の位置を参考に、新道だと考えられるルート『徳島眉山公園地全図』に記入し、図-9に示す。

また明治44年1月30日の記事には、「天野亀吉氏は夙に眉山の風致に注意して其の所有地なる桃山に小遊園を造り大瀧山との連絡道路を設け櫻樹を植ゑ瀧山の面目を一新せしめたる」とも書かれており、詳しい時期は特定できないが、天野氏が眉山公園保勝会を設立する以前から個人で活動していたという『阿波人物鑑』の記述<sup>13)</sup>の一部は裏付けられた。

天野氏が所有していた桃山の位置については、『眉山公園案内』<sup>14)</sup>の中で、「八坂神社にいれば東山である、(中略)この東山につづいた東方に眉山公園を首唱した功労の人、丸天主人の故人天野亀吉氏が山地を購つて公園を拓いて」と説明されている。また『徳島眉山公園地全図』の開発図を描いた林鼓浪氏<sup>15)</sup>の著書<sup>16)</sup>の中で、五明文庫と大弓場は明治40年ごろに天野氏に土地を提供してもらって移設したといわれている。既出の新聞記事に登場する「大瀧山との連絡道路」は、『徳島眉山公園地全図』を見る限りでは大瀧山公園（神武天皇銅像前広場）につながる道路であると考えられることができる。八坂神社と五明文庫、大弓場の位置を参考に、桃山と考えられる場所と、天野氏が個人で整備したと考えられる大瀧山との連絡道路を、『徳島眉山公園地全図』に記入し、図-9に示す。



図-9 徳島眉山公園地全図に見る新道と桃山，東山，大瀧山公園の位置（筆者プロット）

#### b) その他

新道と沿道の植樹以外に整備しようとしていたものはないか探るために、『眉山公園地全図』に描かれている建物などを、当時の眉山の様子を記している文献と照らし合わせた。その結果、名称が明記されている建物の多くが、天野が新道開発を始める前からあったものであることがわかった。

一方、桃山付近と忌部神社西に描かれている名称が明記されていない建物については、近くに赤い布を敷いている様子が見て取れることから、新設の茶屋（図-10）

であると考えられる。また、新道だと考えられるルート沿いには電柱と電線（図-10）が描かれており、夜間用の照明であると考えるが、照明に関する記述はみつかっていない。



図-10 新設の茶屋だと思われる建物と電柱（徳島眉山公園地全図拡大図）

#### (4) 実際におこなわれた眉山公園開発について

眉山公園保勝会は、明治44年になって一般に眉山公園開発を呼びかけ始めたが、その後の工事に至るまでの動きや、実際の工事区間、実現された内容などは、『徳島市史』『徳島市議会史』には明記されていない。そこで、眉山公園保勝会が工事に着手するまでの流れや実現した内容を把握するために、明治44年以降の徳島毎日新聞から、眉山公園保勝会についての記事を抽出し、整理した。眉山公園保勝会に関する新聞報道内容を表-3に示す。

表-3 眉山公園保勝会に関する新聞報道

年号	西暦	眉山公園保勝会に関する新聞報道の内容
明治 44	1911	7月12日 眉山公園計画の内容が報道される。
大正 2	1913	7月1日 眉山公園設置のために天野亀吉が市有林の借用を願った件で、市の助役及び書記による実地踏査がおこなわれる。
		7月2日 市当局としては許可する方針であることを、市会に提出する予定であると報道される。
大正 3	1914	1月6日 眉山公園道路敷として、市有山林無償使用の件で、市長から許可がおりる。
		1月30日 出願していた市有林の許可がおりたので、2月中旬より眉山公園着手される予定であると報道される。
		3月5日 保安林を道路新設のため開鑿許可を縣へ出願していた件で、縣において実査の結果、道路を新設し、公園とすることが一層風致を増進させるものになると、出願を許可、保安林を解除申請する予定であると報道されている。
		4月17日 眉山公園の進捗状況について、保安林の許可がおりれば順調に計画は進むであろうと伝え、現在は寄附金の募集に取り掛かっていると報道される。
大正 4	1915	2月13日 眉山公園道路は大半が完了しているが、八坂神社上方へ接続する道路の新設のために、天野亀吉が市へ土地使用の許可申請をおこなっている。
		4月3日 眉山の新道は、計画では秋葉神社から勢見山に至る二千七百間の道路であるが、現在は大滝山と瑞巖寺山二本松の間で打ち切っていると報道されている。
		4月22日 大滝山に神武天皇銅像前にて、眉山保勝会第一期線開通式がおこなわれた。招待客約200名で、來縣中の蜂須賀茂韶候も列席されたことと報じられている。開通した区間は神武天皇銅像前から八幡神社上に至る間である。

表-3より、以下のようなことがわかった。

- ・市有林の使用を徳島市に、保安林の開鑿許可を徳島県に出願していたこと
- ・大正4（1915）年の4月に第一区間の開通式がおこなわれ、神武天皇銅像前から八幡神社上に至る間が開通し、工事の一区切りがついていたこと

#### 6. まとめ

今回の調査で明らかになったことを以下に示す。

- ・眉山公園保勝会の幹事のほとんどが、商工会議所議員の歴任者であり、眉山公園保勝会が商いに関係する人

物を中心に構成されていたこと

- ・天野氏以外にも、眉山公園保勝会の役員の中に当時、眉山の土地を所有していた実業家がいること
  - ・眉山公園保勝会による主な開発内容が、新道開発と沿道への植樹であったこと
  - ・眉山公園保勝会（天野氏）が、市有林の使用を徳島市に、保安林の開墾許可を徳島県に出願していたこと
  - ・大正4（1915）年の4月に第一区間の開通式がおこなわれ、神武天皇銅像前から八幡神社上に至る間が開通し、工事の一区切りがついていたこと
- 今後、開発の意図を推測するために、以下のことを明確にする必要がある。
- ・当時の土地の所有者と、その位置
  - ・眉山公園保勝会設立後に、眉山に新設された建物や店などの有無、役員との関係性
  - ・第一期事業完了後の眉山公園保勝会の活動について
- 以上のことを明確にし、開発意図を推測することで、眉山の空間変化と、人々の眉山に対する意識の変化を明らかにすることを目指す。

## 参考文献

- 1) 『徳島及小松島ヲ中心トスル鳥瞰図』（小山助学館、1931）
- 2) 『徳島市史 第一巻 総説編』（徳島市役所、1973）、『徳島市史 第四巻 教育編・文化編』（徳島市教育委員会、1993）、『徳島市史 第三巻 産業経済編・交通通信編』（徳島市教育委員会、1983）、『徳島市議会史 第一巻』（徳島市議会、1989）、『徳島市議会史 第二巻』（徳島市議会、1991）
- 3) 『徳島日日新報』（徳島日日新報社）、『徳島毎日新聞』（徳島毎日新聞社）
- 4) 『徳島市議会史 第一巻』P348-349（徳島市議会、1989）
- 5) 『なつかしの徳島風物』（出版、1970）、『眉山公園案内』（小川國太郎、1930）、『徳島縣新名勝案内』（阿波名勝会、1934）、『阿波物語』（林鼓浪：徳島新聞社、1954-1955）
- 6) 『なつかしの徳島風物』p1（出版、1970）
- 7) 『徳島縣新名勝案内』p23（阿波名勝会、1934）
- 8) 『なつかしの徳島風物』p83-89（出版、1970）
- 9) 『徳島市史 第一巻 総説編』p401（徳島市役所、1973）、『徳島市史 第三巻 産業経済編・交通通信編』p619（徳島市教育委員会、1983）、
- 10) 天野亀吉は、『徳島県歴史人物鑑』（徳島新聞社、1994）によると、明治から大正にかけて徳島で活躍した実業家である。西新町で「丸天」の屋号で堺の銘酒「春駒」を売り、大正2（1913）年には自己の所有する堀裏町（現南内町2丁目）の劇場春日座を活動写真（映画）の常設館に改造し「三友倶楽部」と名付け、数人と協同経営していた。他にも、明治35（1902）年に新町橋・撫養文明橋間に巡航船を運航するなど、実業家として多方面に活動していたことがわかる。
- 11) 『御大典記念阿波人物鑑』（徳島日々新報社、1928）、『阿波人物志』（藤井喬：1973）、『徳島県百科事典』（徳島新聞社、1981）、『徳島県歴史人物鑑』（徳島新聞社、1994）
- 12) 『徳島商工会議所七十年史』（徳島商工会議所、1967）
- 13) 『阿波人物鑑』p230（徳島日々新報社、1928）
- 14) 『眉山公園案内』（小川國太郎、1930）
- 15) 林鼓浪は、『徳島県歴史人物鑑』（徳島新聞社、1994）によると、徳島市西大工町出身の画家であり、芸能音研究家、郷土研究家でもある。青年期に神戸に出て、演劇・活動写真に従事し、芝居の脚本を書いた。また若い頃から画を森魚淵に学び、風俗版画風の独特の画風を築いた。長じて芸能音曲に通じ、富街検番で芸姑の指導にもあたっていた。また郷土史を吉田東洲に学び、阿波郷土会、徳島市談会の会員となり、郷土芸能や阿波踊りの解説を放送した。県文化財保護委員となり、昭和40年徳島市の人間文化財に指定された。林は、明治後期から昭和初期にかけての眉山麓の様子や、当時の風習や行事を描いた画や著書を多く残しており、当時の市民の暮らしぶりを知ることができる。また、眉山公園保勝会が、設立当時に配布した開発図を描いたのも林である。そして、著書『阿波物語』の中には天野亀吉が眉山公園開発を提唱するきっかけになったエピソードが書かれている。

16) 『阿波物語』（林鼓浪：徳島新聞社、1954-1955）、「林鼓浪遺作集」に収録 p121